

## 密約

昨夜の激しい野分も今朝はすっかりおさまって、菱刈の空は広々と抜けるように青い。稲の倒伏を気づかって、朝食もそこそこに葦毛の愛馬に笞を入れて田の中に行く梅北宮内左衛門国兼の頬に、昨日までの蒸し暑さが嘘のような冷涼な空気が心地よかった。

「この分では大した被害でもないのう」

従って来た近習の崎山新助に掛ける声も明るい。彼の眼前には、やや傾いてちらちらと白い稲穂を見せているまだ色づかぬ緑の田園が大きく広がっていた。兩岸の伸びた青草を映してふかぶかとした緑濃い水を湛えた川内川が、日頃より勢いを増して流れている。九州山地の南端を下って始まる九州第二のこの大河もこのあたりはまだまだ狭いが、流れ込む水系の広いことから、雨期には暴れ川と化して氾濫を繰り返す厄介者である。しかしこの川あつての稲作なのだ。川沿いにしばらく走った彼は、ふと馬を止め空を仰ぎ「ああ」と大きく息をついた。安堵とも嘆息とも取れる複雑な吐息であった。

農民たちの一年の苦勞の結晶である米。幸い豊作と言えるであろうが、その収穫のどのくらいが彼らに残されるだろうか。穀倉地帯菱刈の湯の尾城地頭として、今後成さねばならぬ過酷な年貢の取り立ての責務が、国兼の稔りの秋の喜びに重くのしかかっている。天正十九年、旧暦八月ももうすぐ半ばという頃であった。

四年前の天正十五年春、秀吉の九州攻めがあり、五月には島津義久、義弘が秀吉に全面降伏をしたのだった。勝敗を決定づけた四月の豊臣秀長との根白坂の合戦には、国兼も参加し、左肩に刀傷を負った。そして最愛の一人息子兼清もそこで戦死していた。西からは雲霞の如き秀吉の大軍が川内川河口から攻め上る。如何に九州の覇者となった島津氏といえども、国を挙げての武力、金力を手にした太閤の威力には遠く及ばないことを、強く認識させられた戦であった。

一方、集めに集めた大軍の兵糧に不安のあった秀吉は、長居は出来ぬと覚っていた。秀吉は、いかにも寛大気に川内泰平寺において義久に薩摩を、鶴田の山中の陣で義弘に大隅の殆どを安堵し、さっさと退陣して行ったのだった。

島津氏は滅亡は免れたが、敗者は敗者であって、辛い務めが課せられた。戦国時代の常として、絶対に無視することの出来ない要人を人質に差し出さねばならない。川内の泰平寺で娘の亀寿を人質に差し出した義久は、その僅か一ヵ月後の六月十五日には新納忠元の子息の忠増をも人質の一員として同道して、自らも京都に上らざる得なかった。安堵された薩摩、大隅の領土に対し、敗戦後の混乱を建て直す暇は全く与えられなかった。

翌年の春には、義弘にも上洛の命令があった。頭領の二人が不在となるということで、島津氏の支配下薩隅一帯の気運は暗かった。義久は、義弘が京に着いて三ヶ月後にようやく帰国の許可が出て、十月に鹿児島

に帰ることが出来た。しかし翌天正十七年には再び義久が上洛、義弘と交代する。またその翌年の秀吉の小田原攻めには、義弘の長男久保が兵を率いて陣に加わることを要請された。そしてその秋には義弘が京に上り、暮れに義久が帰国を許されるという連年の参勤が続いた。そしてこの遠路往復や京での生活、加えて秀吉からの寺院建設の資金の要請があるなど、莫大な費用を必要としたのだった。

島津氏は長年の間、九州制覇を目指して激戦の連続であった。その後の太閤に対抗しての戦いの消耗も酷かった。島津氏の財政は全く底をついていた。しばらくは借財で凌いで過ごすとしても、それらのツケの全ては地元の農民からの過酷なまでの徴税で賄うより他はない。領主の命令によって実際にその任に当たるのは、その土地の地頭である。

「お帰りなさいませ。田は如何でございました」

妻の初が玄関に三つ指をついていた。初は目鼻立ちのはっきりした瓜実顔の品のある顔立ちだが、その中程にあるそばかすが、気さくな和やかさを感じさせる女であった。国兼より五歳も年下ながら、近頃はめっきり小皺も増えて、小さくなったように見える。

「うむ。もうすっかり秋の気配じゃよ。野分も大したこともなかった。まあ豊作は間違いなからうが」

国兼は走り寄って来た二人の孫を抱き上げた。五歳の桔梗と三歳の杉丸である。恥ずかしげに身をよじる桔梗を下ろすと国兼は杉丸を高々と差し上げた。

「おう、大分重くなったのう。そうだ。今日はあの柝の小太刀を削って進ぜようのう。あともう少しで完成じゃよ。ただ家の中で振り回すではないぞ」

国兼は上機嫌で、小走りに迎えに出て来た一人息子兼清の嫁の菊に杉丸を手渡した。兼清が根白坂の激戦で命を落としたため、杉丸は父を全く知らない。この所の国兼夫妻は子を失った悲しみを孫の溺愛で紛らわせるようになっていた。両の鬢に白髪が目立ちはじめた二人であった。国兼はこの次の正月には六十歳を迎える。

その正月も瞬く間にやって来た。搾り取るような年貢の取り立ても終わった。幸い強硬な反抗者もなく、笞を振るうこともなかった。どの農民もこの苦難の時を察していた。人づてに肥前、肥後の豊臣の武将に与えられた土地の人民が、どれほどの苛酷な拷問に責められ、虫けらのように殺されているかを山を越えて来た行商人に聞いていた。

つましい国兼の質素な生活振りが何よりの庶民の鎮撫であった。客人はきちんともてなすものの、国兼の家族は話題になるほどの粗衣粗食であった。

ある夕べ見回りから戻ると初が告げた。

「あれに使いの者がお見えになって居りますが。どなたからのお使いでしょうか。殿にお目に掛かるとのみ申されて居ります」

国兼が奥に目をやると庭に面した縁に旅の僧が小さく座っている。

「これはお使いご苦労でござる」

国兼が近寄ると、初老の僧は目配せで人払いを要求した。国兼は無言で僧を奥座敷に招じ入れた。

「実は金吾様からのご伝言があります。紙は証拠になりますので手紙は持参して居りません。全て口頭で申し上げます。」

僧は懐から袱紗を取り出すと、そっと開いて中の透かし彫りの鍔を国兼に見せた。国兼はそれを見てハッと身を退いて一礼した。大きく口を開けた竜が丸に十の字の家紋をくわえている図柄のその鍔は、同じものを国兼も金吾様すなわち島津歳久から頂戴していた。歳久は、義久、義弘の弟で太守貴久の三男、母は共に入来院重聡の娘雪窓である。

天正八年肥後に相良氏を攻め、水保で勝利の祝杯を挙げた時のことであつた。席も乱れはじめた頃、国兼は歳久に手招かれた。

「そちとわしは共に伊佐の地を抑えているが、なによりも手強いのは川内川じゃのう」

歳久は感慨深い面持ちで、身を乗り出して言った。

「この共通の暴れ者には、学ばねばならぬことも、協力せねばならないことも多い筈じゃそのうちゆっくり語り合おうではないか。時にこの鍔はわしの気に入った図柄でな。同じものを少々作らせてある。わしの信頼の印と思って、今後とも力になってくれ」

歳久は国兼に、紫の袱紗に包まれた品を手渡した。国兼は大切に文箱に保管したが、それがこれと同じ物であつた。歳久は国兼の篤実な人柄をその堅実な戦いぶりに感得していて、何かの折の頼みにしようと思つたに違いなかつた。

僧は低い声で続けた。

「このご時世に対し、内々で諸氏と協議したき由にござります。期日は三日後の二月一日戌の上刻と承りました。場所は新納入道様のお歳も考えられて、曾木の滝の南の民家とのことでござります。滝までお出で下されば案内人がお連れいたします。供の者は二名ほどに。あくまでお忍びでとのことでござります」

「きっと承りましてござりまする」

国兼の返事を確認すると、僧は丁重に包みを胸の懐に仕舞って立ち上がった。長居は無用であつた。玄関に出た夫の緊張した硬い表情に、初も無言で見送りに立った。何かが起こるという予感が彼女の表情を暗くしていた。

二月一日。遠く紫尾山系の空を茜に染めて陽も落ちると、冷たい風とともに宵闇が訪れた。国兼は崎山新助と野田数馬の二人を従え、ひっそりと城を下った。屈強な二人は、兼清の遊び相手として子供の頃から国兼に可愛がられて来た。兼清の亡き今、彼らは国兼の心情を思いやって、積極的に国兼に尽くすよう心掛けていて、常に彼の身近にあつた。

約束の日が来た。目指す曾木の滝は川内川を二里（八キロ）程下った所にある。落差はさほどではないが、連なった大奇岩の群れを、遮られ

た川内川の豊かな水が流れ落ちる様は壮観である。轟音の傍らの木立の中を行く彼らの前に人影が現れた。

「宮内左衛門様」

「おう」

国兼が答えると、小柄な武者が小走りに寄って来て、無言で先立って歩いた。ある一軒の農家が会合の場所となっていて、内外とも小奇麗に掃き清められていた。馬を繋ぐと、供の二人は外の警固に廻った。

二間四方の板の間には、赤々と燃えている炭火が入れられた大きな火桶が据えられ、三本の灯明がゆらいでいた。部屋の片隅にはすでに入来院又六重時が板壁にもたれて黙念と座っていたが、国兼を見ると坐りなおし無言で会釈した。

重時はまだ二十歳の若さである。養父重豊の病死により十五代当主として入来院家を十一歳で背負った。養母の入来院重豊の妻は、父以久の姉で伯母に当たる。二人とも貴久の弟忠将の子で、歳久の従弟妹にであった。幼くて伯母とは言え親元を離れた重時は、精神的に苦勞も多かったためか、寡黙で軽拳盲動をすることは無く、年長の親戚筋にも一目置かれる存在であった。

ややあって大口より小腰のやや曲がった新納忠元がせかせかと入って来た。この小柄で陽気な男が、鶴田の陣で秀吉と堂々と渡り合ったとは信じ難いことだ。

「これは又六どの。一段と大きうなられましたなあ。あっぱれな男振りです」

「いや入道殿こそご壮健のご様子。何よりでござる」

重時はそつなく言葉少なに受け答えた。末席に坐っていた国兼は丁寧に一礼した。彼は一介の地頭である自分が、この重要と思われる会議に連なるのだという晴れがましい思いで、緊張していた。

一陣の風とともにさっと歳久が入って来た。彼は上座に座りそれぞれと簡単な挨拶を交わすと、一同を見渡して言った。

「お家のためとは言え大儀でござった。あと一人参る筈じゃ。誰か分かるかのう」

一同は顔を見合わせた。歳久は中風を病んでいると表明していたが、全くそのようには見えなかった。五十も半ばの熟年の落ち着きが端正な面持ちに加わって、人を威圧するものがある。これが血というものであろうかと国兼は思った。

遠くに馬のいななきが聞こえた。三四人が急ぎ駆けつけた気配である。入って来た背の高い恰幅のよい男の顔を見て、ああと一同は驚きとも納得とも言えない声を上げた。義久の家老職町田久倍であった。彼はここからはかなり離れた鹿兒島の内城で、今は戻っている義久のもとに仕えている身であった。

久倍は国兼より五歳は年下であろうか。武骨な国兼に対して、瀟洒な垢抜けた感じのする人物である。一通りの挨拶が済むと人々の驚きを鎮めるように、久倍は腰を拳で叩きながら言った。

「大層腰が痛むので霧島の湯に三日ほど浸かることの許しを得ましてな」

思わず一同の口許がほころんだ。歳久は

「近う近う」

と言って殆ど膝も突き合わすほど身近に全員を集めた。そして低い声で言った。

「集まってもらった各々方は、いずれも太閤様ご入国のみぎり、最後まで戦うことを主張されたことを覚えて居ろうのう。あの折はわしは抵抗は無駄だと言ったのだが、おぬしらの主張が通ったのだったな」

確認するように歳久は一人一人を見わたした。

「今は竜伯様（義久）のご説得で一応は降伏の形を取っては居るのだが、実に屈辱の日々という他はないのう。理不尽の要求は止まるどころを知らぬ。おぬしらもいずれはこのままではおかぬと思っていることとわしは察して居るのだが如何かな」

一同は深く頷いた。

「聞き及んで居ろうが、この度は唐入りとか、海を渡って朝鮮を攻めるという狂気のご命令じゃ。この疲弊しきった民を抱えた我等を何と心得ておられるのかのう。昨秋は名護屋に築城ということで、多くの農民を送りだしたが、今度は人ばかりではない。船や兵糧など背負えぬ重い調達と、二度と戻っては来れまい無謀な戦への出陣のご命令じゃ。到底受け入れることは出来まいと思うが、今は拒絶すれば自らの死ばかりでは済まぬ。お家の断絶を招くことになる。これは何としても猿面冠者の首を掻いて世の中を引っ繰り返すことを謀らねばならないと思うがどうだろう」

暗い面持ちで再び一同は頷いた。歳久は力を込めて続けて言った。

「どうだ。どうせ戦で落とす命。異国で死ぬよりもわしに命を預けてくれぬか」

皆が密かに予測していた話であった。何故の集まりかもうすうすは感じていた。それに今は戦国の世である。死は常に隣にあったから、覚悟はとうに出来ている。しかし歳久の語気にはただならぬ力があつた。

「これからの話は一つ間違えば島津家の存亡にかかわる。首尾の如何に係わらずお家は何としても守らねばならない。この謀は紙には残さぬ。書き物はこのあと全て焼き捨てる。ここに居る者のみ頭にしっかりとたたき込み、間違いなきよう。またおくびにも出すことのないように。いいな」

歳久は矢立を取り寄せ紙を広げて大まかな九州を描いて、現在の勢力者の名を書き加えて行った。

「宮内殿の他は、我等みんな先ず病に罹るのじゃ。朝鮮には代理を差し出しておいて、その間に各々後方で宮内殿応援の勢力を固める。宮内殿は、出陣後に名護屋で太閤に不満を持つ者を仲間に入らせるよう努めて下され。太閤に背く仲間を一人でも多く集めて、勢力を大きくするようにしてほしいのじゃ。我々も影で後押しする故、自信を以て説得なさ

れよ。いずれ多くの軍が渡海して本陣が手薄になるであろうから、それまで素知らぬ顔で待たれよ。そして機を見て一気に攻めたてるのじゃ。目的はあくまで太閤殿である。若し警固が十分の場合は、太閤殿のご渡海を待って、お留守になった本陣を攻められよ。背後が攻め落とされれば、慌ててお戻りじゃろう。そこを逃さず討ち取るのじゃ。

ただこの企てが失敗した暁には、全ての責めはわしが負うつもりじゃ。しかし場合に寄っては、お家のために梅北個人の反乱として死んでもらわねばならぬことになるやもしれぬが。よいか」

歳久はじっと国兼の目を見つめた。国兼は短く「はい」と答えた。日頃秀吉に対しては兼清の仇を討ちたいものとの思いがあった。これからの出陣の敵が朝鮮ではなく、太閤であることの方が実感は出来る。しかし失敗したときの血族に対する厳重な処罰は免れ得ないであろうと思った。それが一瞬彼の心を冷し、表情を暗くした。しかし歳久の、誰よりも自分に頼んでいるこの信頼には、男として全てを捨てて報いずばなるまいと、心密かに臍を固めるのだった。

「これは大きな賭じゃ。成功するか失敗するか。失敗したときの申し開きには万全の策を取らねばならぬが、その見極めは出羽殿、そちがなされよ。策が成り立たぬ折は、出羽殿は何食わぬ顔で我等を討たねばならぬことになるやも知れぬ。但し成功の見込みありとの判断ある時は、全力で宮内殿を助けるのじゃ。ここは慎重、冷静なおぬし以外には任せられぬ」

町田出羽守久倍の表情もこわばった。天井を仰ぎ想定される様々な情勢を頭に描いた。「私めとて朝鮮の虎の餌食にも、金吾様を討つ羽目にはなりたくございません。ここは何としても宮内殿に働いて成功して頂きましょう。共に知力を尽くすしかありませんな」

「又六殿は隊を二手に仕立てて、半分は失敗したときに備えるようになさるがよい」

歳久は重時に言った。歳久の居城虎居城のある祁答院の地は、昔から入来院氏一味の渋谷一族の勢力下であり家臣にそのゆかりの者も多く、島津の縁戚でもある重時は、歳久にとって最も力と頼む所である。歳久は忠元に言った。

「入道殿には忠光殿を太閤様の近習にお出しなされている由。孫どのの成長は早いものじゃのう。忠増殿も人質とされてご苦労なことであった。朝鮮にも、先ず召されること間違いござらぬな。近頃は幽齋殿とは親交を深められて居る由、上方の動きを知るためには何よりのこととござる。これからも小さなことでも動きあらばお知らせ下され。難しい御立場ながらご協力お頼み申す」

武蔵入道新納忠元の長男忠堯は、八年前に肥後の島原深江で討死にしていた。孫の忠光がまだ少年であることもあり、次男の忠増が六十七歳の忠元の代理を努めることが多い。有名な鶴田に於ける太閤に目通りの折り、御前での細川幽齋との歌のやり取り

鼻のあたりに松虫ぞなく

(幽齋)

うわひげをちんちろりんとひねりあげ (忠元)

が縁で、忠元と幽斎の間には文通が始まり、友情も育まれていた。加えて忠増の中央での見聞や体験談、忠光から直に手に入れた情報などから、忠元は彼らの中では最も諸大名の動きや政局に詳しい。

「太閤様の唐入りのご執念はなみなみのものではござりませぬ。ただその強引さに諸大名が全く逆らえないというそのお力は大したものでもござりましてなあ。そのご威光は田舎者の我等には想像もつかぬことでもござりまする。私めの見るところ、殿のご計画の成功はほんの二分ほどのものかと思われませぬ。ただ例え一分でも可能性があれば、試みない手はないでありませぬ。犠牲を恐れては世の中何も変わりませぬ。お家に何事もなきよう企てませぬ。この忠元の一命はとうにないものと思つて参りました。あとはよきように計らいます故、安心して実行して下さい」

歳久は大きく頷くと、手近かな灯明の火を手元に寄せた。図面を中にそれぞれが意見を出しての協議が一刻ほども続いた。

「うむ。これで太閤めを倒す筋書きは決まった。各々方もその役割もよく納得されたようじゃな。心を一つに働くお覚悟のほどは確かに承った。歳久、心から嬉しく有り難く思うぞ。宮内殿、くれぐれも事を運ぶは迅速を要することがお分かりであろう。頼んだぞ」

頭を下げた歳久は、やがて背筋を伸ばし、手にした紙を丸めて火桶にくべた。舞い上がらぬよう火箸で抑えながら。それが灰となったのを見届けると一同は帰り支度を整え始めた。

外は風も止み十日の月が山の端に傾いて、木々の影が一際大きく見えた。供の者が揃えた馬に跨がると皆一言「さらば」とだけ告げて、それぞれの道に散って行った。この人たちとは多分再び会うことはないのかも知れぬと国兼は思った。彼は、冷氣よりも思い責務と厳しい寂寥に馬上で身をすくめていた。

夜半に表情も固く館に戻った国兼を迎えた初は、これは何か重大な使命を背負ったのではと感じながら、手早く冷えた衣服を脱ぐのを手伝った。湯壺で温められた寝巻に着替え臥所に入った彼は、思い切り手足を伸ばし、じっと天井を見つめた。しかし口は開かなかった。

十日ほどが過ぎた。栗野の義弘から

「自分は今月末迄には、朝鮮出兵のために名護屋に向かう。それぞれ用意怠りなく後から続くように」

との命令が届いた。

「いよいよおじいちゃんも唐入りと言つてな。異国を攻めに行かねばならぬのよ。そこの山には大きな虎が沢山居るそうじゃ。一匹くらいは仕留めて毛皮の敷物を杉丸に土産にしたいものよのう。それまでは、じっとおとなしく待っているのじゃよ」

国兼は杉丸の頭をゆっくりと撫でた。また二三日が経った。

朧月が裏山から顔を出した。風も柔らかい春風。山桜も綻びはじめた。国兼は、極秘裏に杉丸を大口の新納忠元のもとまで送るように、崎山新

助に命じた。新助は僅かな荷物と柞の木刀を鞍に付けて、杉丸を背に夜の川内川沿いの道をやや速歩で走った。

忠元は、すでに杉丸を信頼の置ける初老の夫婦に預ける手筈を整えていた。新助は杉丸と二日を共にした後、しょんぼりとした杉丸に心を残しながら湯の尾に戻った。

「お姑様。杉丸はどうなっているのでしょうか」

もう堪えきれぬとばかりに菊が言った。菊は杉丸を案じて食も喉を通らないのか、やつれて顔色も蒼い。

「このご時世ですからね。人質にされることもあるかもしれませんからね。わたしは隠されたと思います。あれほど可愛がっておいでのお館様のこと。悪いようにはなさる筈がありませんよ。無事に決まっています。桔梗も淋しい筈、よくお相手して上げなされ。何事もなきように振る舞うことがこうした場合の私達の務めです。そなたがどなたかのご家中に所望されているということもあるかもしれませんよ」

初は万一の時のために夫が杉丸を隠したのだと密かに覚っていた。その時は自分も菊も命はないのであろう。長年、死と隣合わせの戦乱の中を夫とともに生き抜いてきた初は、武士の妻の過酷な立場を深く覚っていた。しかし菊に無用な不安を伝えて、動揺させてはならない。夫が大きな謀を背負ったであろうことを絶対に覺られてはならないと思った。初は冗談めかして穏やかに菊に笑って見せた。

矢岳山の峠より南を見下ろすと、霧島山系を背に広々とした飯野（えびの）の高原が広がっている。その中央を白髪岳から生まれた川内川が、悠然と東から西へとくねりながら流れる。それは周囲の小川を集め育ちつつ霧島山系の西を南下するが、やがて西の北薩へと進路を転じ、堂々と東シナ海に流れ込む。その大きくカ-ヴする地点に義弘が居城としている栗野がある。

二月二十七日、義弘は秀吉の度々の督促に逆らえず、戦備も思うように整わぬ中を、先ず長男の久保と栗野を発った。若い頃より合戦に明け暮れた義弘はすでに五十八歳。この年になっても第一線の戦闘を余儀なくされている。彼は武庫様と呼ばれ、武略、智略に優れ、その戦には家臣すべてから信頼されて来た。国兼より二歳年下であったが、白髪と深く刻まれた皺が長年の労苦の程を物語っていた。

出立は、一面白雪に覆われた寒い朝であった。懸命に募ったにもかかわらず従う者は僅か二十三騎のみ。揃って若宮八幡宮に武運長久を祈ると、一行は元気良く川内川沿いに下った。そして先ず湯の尾の国兼の館に手綱を繙いた。

国兼は四十年前、義久、義弘の父貴久の直参となり、依頼数々の軍功があつて、今は湯の尾の地頭に取り立てられていた。

国兼は一同を心尽くしの宴でもてなした。

「新しい湯船を用意してあります。この辺りでは出湯はここしかございません故、ゆっくりとお浸かりなされて、お体お休めなされませ」

湯の尾はその名の如く館の下を流れる川内川縁に温泉が湧き出ていた。近郷の里人も自然の岩場に湯浴みに来ていたが、隣接して国兼やその家臣のためにと柴の垣根を巡らし、檜の湯船がしつらえてあった。近々義弘一行が通過することを知った国兼は、急遽それを新調させたのであった。

湯浴みの後、新しい平服にくつろいだ義弘父子に、国兼は川魚の塩焼きや囲炉裏で燻製にしてあった鮎を干大根とともに煮つけたもの勧めた。「お勤めとは言え、ゆっくりお休みの間もない毎日では、お体に障るのではござりませぬか。若君もまだまだお体づくりの肝要な時でございましょう。遠い関東でのお働きもあって、この栗野までご帰還なされたばかりでございましょうに。この度は朝鮮までご出陣をされるとは、只事とは思えませぬ。何というご政道でございましょうか」

言外に秀吉への非難を含めながら国兼は、「こうして太閤様のご意向に沿ってご苦労なさるのも、一重に我等の為でござりますなあこの国兼は先代様よりこの方、身に受けた数々のご恩は、片時も忘れることはございませぬ。きっと思い残すことのなきよう働く所存にござります」

としんみりと感謝の辞を述べた。そして自分も今は準備中であるが、必ず後から兵を整えて参戦する故、名護屋でお会いしましょうと言った。

翌朝、久保は馬越に寄って、近辺の兵を募ると言って七騎とともに出立した。義弘はもう一夜を湯の尾で過ごした後、三月三日に大口に着いた。忠元も心から歓待した。

「もう十年も前でございましたら、真先かけて参じましょうものを。歳はとりたくないものですなあ。槍も重くなり、目も不確かになりました。次男の忠増には出来る限りの手勢を付けてお供させましょう」

翌日は久保も大口に合流した。秀吉に降伏してからの領民の疲弊はひどく、呼びかけだけで兵を集めることは出来なかった。あとは忠元の強引さに頼むより他はない。

早朝に出立の挨拶を受けた新納忠増の老いた母の嘆きは深かった。いつの世も母にとってわが子を戦に送り出すことは悲しいものだが、如何に戦国の世とは言え、今回は特に朝鮮という想像もつかぬ遠い所にわが子を送るのだ。急ぎ別れの酒の用意をした母は

「この歳では、そなたの帰るまではとても生きてはおれまいのう」

と涙にむせびながら嘆いた。差された杯を飲み干した忠増は、自分の下げていた袋から干し炒り子を取り出してお盆の隅に置き、母にそれを勧め、返杯した。

「母上。今回の出陣はまだ朝鮮で戦うと決まったわけではございません。日本中の武士を名護屋に集めるということです。私はそこに止まるように致しますから、何もご案じなさいませぬ」

酒を酌み交わしながらの忠増の慰めにようやく母の表情も和んだ。忠増はその隙に外に出ると馬に跨がった。忠元は十六騎の兵を忠増に付けていた。

義弘父子を大手門まで見送った忠元は、寒さと涙で目も鼻の頭も真っ赤にして忠増の通るのを待っていた。その父の姿を見て忠増は思わず涙ぐんだが、気をとりなおして手を振って別れを告げた。声を掛ければまた涙を誘う。忠増は駒の歩みを止めず、名護屋を目指し、肥後の山系を一路北へと進むのであった。

旧暦の三月、雛の祭りも過ぎれば、菱刈の山々も芽ぐみはじめ、桜も一斉に綻びる。八日、国兼は手勢四十三名と出陣した。殆どの蓄財を金に換えて持参することにしていた。初は黙って夫の成すがままに従った。「唐入りともなれば、再び会えぬであろうのう。わしにはこの春は見納めじゃな。そちは嫁と仲良く楽しく、一日一日を大切に過ごされよ」

出陣の祝い酒を受けながらの国兼の言葉に、初は沈んだ声で言った。「私の魂はいつもそなたと共にあるとお思い下され。私は死を恐れては居りませぬ」

(この女はわしの使命を察しているな)

国兼はそれまでも漠然と感じてはいたが、今またそれと確信すると、愛しさとさに臉が熱くなった。そしてしばらく無言で初の手を握った。

(うむ。三途の川を渡ったところで待っているぞ)

彼は心の中でつぶやいた。初は精一杯微笑んでみせた。

国兼には生死を共にと誓い合った盟友がいた。

今から四十三年も前のことである。梅北氏は大伴姓で都城の梅北邑に居住していた由緒ある家柄であり、国兼はその十六代目であった。まだ十七歳の国兼は、梅北邑の属する三股院地方の領主樺山氏の一兵卒として本田董親を攻める陣にいた。ある時、本田攻めを指揮していた島津貴久の配下に自分より年下と思える足軽を見つけ、声をかけたのがきっかけで、二人は仲良くなった。

その足軽の父田尻種家は伊作の農民であったが、貴久の父忠良に目を懸けられ、当時は足軽頭になっていた。種家は、遅しくも思慮深げな国兼が、兄貴分として息子のよい相談相手になるだろうと思い、国兼を自分の隊に誘った。国兼も貴久直属の家臣になることは望みであったから、喜んでその手下になった。

地道に励む国兼は、五年後の天文二十三年、田尻種家が侍となったのでその後の足軽頭を継いだ。そして渋谷氏・蒲生氏・菱刈氏の連合軍との合戦岩剣城に臨んだのであった。その激戦での着実な戦いぶりが貴久の目に留まる。貴久は、わが子義久と同年のこの若者が、次代のよい家臣として子供たちの支えとなるであろうと思った。

国兼は義久の配下となり、期待通り合戦の度に手柄を立て、恩賞や昇進の栄に浴した。祁答院氏が平定された後、帖佐山田の地頭となり、その後菱刈の湯の尾を任された。

一方、田尻種家は永禄四年の肝属氏との合戦で、貴久の弟忠将とともに戦死してしまった。しかしその子の種佑も数々の合戦に従軍し、着実

に昇進した。そして今や川辺山田の地頭となっていた。

国兼と種佑は事ある度に、会して親交を深めていた。妻の初も彼の従妹であった。二人は遠く離れた土地の地頭となった今も、月二三回は文を交わしていた。今回も国兼は出陣の予定を種佑に伝えて、出来れば三月半ばに水俣で落ち合って、共に名護屋へ向かおうと呼びかけて、その応諾の知らせを受けていた。

国兼は、西の海岸沿いに北上して来る筈の田尻種佑と合流するため、川内川の北の支流羽月川を逆上り進路を西にとった。国兼の軍は、水俣川に沿って急な溪谷に人馬とも難儀しながら下った。

入来院重時は、病と称して自分の部屋に閉じこもった。そして自分の代理として一族の入来院左京亮重興と家老の東郷甚右衛門重彰の二人を隊長として送り出すことにした。兵は百五十人、それを二手に分けた。先ず入来院重興の七十五名を川内の久見崎港から船で出発させる手筈を整えた。彼らには天草の西を北上して、直接名護屋へ向かわせた。重時は東郷重彰を呼んで、彼の七十五名は陸路海岸沿いに北上して梅北軍と合流するようと言った。それぞれの軍は全くの別行動となるように考えられていた。

国兼は、種佑、重彰と水俣で合流した後、行動を共にして、船を平戸の船大工に造らせるということにしてあった。まず陸路を肥後の田浦まで行き、そこから船を借りて、天草の北を不知火の海を縫って長崎から平戸に向かう計画であった。

先ず種佑と会った国兼は、津奈木の温泉で重彰を待った。彼らは豊富な温泉にゆっくりと体を沈める。

「こんなゆっくりした気分であったことが今まであったろうか」

「いや、戦の後の血糊を流すためには何度か一緒に入ったことはあったと思うがなあ。合戦がまだ何時とも知れぬのに、何か極楽に居るようじゃのう」

兵卒たちも温泉で疲れを癒し、緩やかな衣を纏った港の遊び女に戯れて酔っていた。国兼は束の間の華やぎを深い感慨を以て楽しんだ。

翌日は重彰も追いついた。まだ四十代の重彰は二人とは初体面であったが、賑やかに酒を酌み交わす間にすっかり打ち解け、妻や娘の自慢話まで始めて、遊び女たちにも冷やかされるほどの人気者になった。国兼は、重彰にも一日ゆっくりさせようともう一泊することにした。しかし、明日の出立を控え宴は軽く済ませ、一同は早めに床に着いた。

翌日海辺で勢ぞろいをして出発した彼らは、薩摩街道と呼ばれる山道を進んで、肥後の湯の浦温泉に草鞋を繙いた。海辺のゆるやかな山に囲まれた古くから知られた湯の浦には小さな宿が何軒もあり、隊長以外の家来はそれぞれ別の宿に分宿した。本陣のかがり火を目当てに、その地の有力者だろうか初老の男が、酒と獲れたての大きな太刀魚を下げて挨拶に来た。続いて瑞々しい菜や山菜などを抱えた老人たちもやって来た。「もう太閤様のご家来には我慢なりません。私達を虫けらと思っておい

でなのか、拷問や殺戮は思うがままでございます。何とぞ私たちをお救い下さいませ」

彼らは涙ながら口々に訴えた。島津様の時代が今は懐かしいとも言って、一頻り愚痴った後、彼らとはぼとぼと帰って行った。

国兼は夕餉の杯を控えて、種佑と重彰に重要な話があると告げた。「お二人とも今日は如何に農民がひどい目に会っているかをご覧になったであろう。途中の殆どの家の戸障子は打ち壊されたままであったな。働き手も一人も見かけることがなかったし、畑も荒れたままの所が多かった。見かけた年寄りもこそこそと隠れる。あの男達の話聞くまでもない。余程の乱暴狼藉がなされたようじゃ」

三人とも昨夜の楽しかった宴は夢のように深刻な表情だった。山道とは言え僅か四里（12キロ）の距離なのに、この荒廃は何としたものだろう。佐々成政の悪政と反乱の一揆のために改易させられたことは知っていたし、その後の小西幸長の搾取も過酷なこととは噂では聞いていた。ここは加藤清正の領地で、家臣が地頭を勤めている。

「我等とて、今や大同小異のようなものかも知れぬ。まだまだ上納もままならないほど困窮しているのに、無理やりのご命令で異国で命を落とす羽目になるやもしれぬのだからのうどうだろう。我等が力を合わせて太閤様の世をひっくり返してみないか。国元にはその場合支援して下さる強い味方があるのじゃ。わしはそれに賭ける心算で動いておる」

国兼は、なるべく多くの同調者を募って一旗揚げようではないか、きっと賛成者は大勢いる筈だ、と自信ありげに言った。

「もし我等が反乱を起こしても、成功するまでにすでに名護屋にいられる武庫様は如何なされますか。まずご無事ではございませんでしょう」

重彰が心配気に聞いた。

「いや、勿論我等は竜伯様や武庫様に危害が及ばぬように動かねばならぬ。先ず諸悪の根源である太閤様の世を引っ繰り返すことじゃ。実はそのことは竜伯様、武庫様ともお分かり下さっていて、その場合の対策はすでに出来ているのじゃ。心配ない。これは大きな作戦であって、我等はその一翼にすぎないのよ」

首謀者が金吾歳久であることは口外に出さずとも、それとなく感じられるよう国兼は言葉を選んでいった。実のところ、この三人とも九州から一步も出たことはない。先年の戦で大量の人殺しに全く無神経になってしまった冷酷な豊臣の家臣達の戦いぶりを見て、共に朝鮮に戦うことなどは全く心にもないことであった。

「ここで目にしたような悪政では、地元の民は我等に味方するに違いない。それは先程の男たちの申したとおりだろうな。また考えてみれば、諸大名の旗頭の面々として朝鮮で死にたい者がいるとは思えぬよ」

種佑も我が意を得たりというように言った。

「我等は生死を共にしようではないか。今は明らかに出来ぬが、これは命令でもあるのじゃ。いいか。この企てを、絶対に漏らさぬと誓ってくれ。謀は密なるを以て良しとすじゃたとい腹心の者といえども他言せぬ

ようにな」

二人は固い表情で頷いた。重彰は、東郷の住民が主体である武士を率いている自分を、国兼に従えさせた重時の真意を感じた。

翌朝は早めに出立した。一行は厳しい懸崖の上にある佐敷城を仰ぎながら、その裾を巡って田浦に出た。先発させておいた者が、何艘もの大きな漁師の船を借り受けてあった。加藤清正の家臣の支配しているこの地に長居は無用である。それに船の借用は短いに越したことはない。彼らは早速隊ごとに船に分乗すると、一斉に帆を上げ、平戸を目指して、穏やかな島原の海を滑るように出発したのであった。

加藤清正の家臣の支配しているこの地に長居は無用である。それに船の借用は短いに越したことはない。彼らは早速隊ごとに船に分乗すると、一斉に帆を上げ、平戸を目指して、穏やかな島原の海を滑るように出発したのであった。

四月初め、国兼らは平戸に着いた。平戸は九州北部の他の港町と同じく、あちこちからの大名の造船の注文で浜には人々が行き交い、活気を帯びていた。玄界灘の荒海を乗り切っていくには木っ端舟という訳にも行かない。兵、馬、武器、食料等の輸送船である。平素ならば三カ月程で完成する船も、人手が足りないので四、五カ月は掛かるという。その値段もウナギのぼりである。力強い造船の槌音があちこちに響き、おが屑が空に舞った。国兼らは船を注文するでもなく、その辺りをぶらぶらと見回っていた。不審に思った者に尋ねられると国兼は言った。

「殿様が国元に資金を督促してられるが、まだまだご都合がつかぬのか、注文のご命令が出ないのよ」

国兼はじっと耳を澄まして、この戦に対する不平不満の声を聞き漏らさぬように努めていた。そしてその声の本物と感じた時は、密かに仲間に組み入れようとした。歳久からは折りにふれて五人、十人と兵が送り込まれ、それとともに資金も届いていたから、不平分子と一杯やる金には事欠かなかった。しかし同調を得るのはなかなか難しいことであったというのは予測に反して日本軍は朝鮮軍に連戦連勝していたからである。

すでに三月半ばには小西行長を初め北九州の諸大名の軍が対馬を経て朝鮮に上陸していた。四月には、加藤清正、黒田長政などが半島奥深く攻め入っていた。長く戦乱の続いた日本の戦に培われた作戦と、質量ともに優位を占めた鉄砲によって快勝を続け、五月には首都京城も陥れるという勢いであった。次々に届く勝利の知らせに名護屋は戦勝祝賀ムード一色に覆われていた。このような中で反乱軍を組織することは至難の技である。それでも鹿児島からの部隊は徐々に増えていた。後続の大隅肝属大始良の地頭伊集院三河も仲間に加わって、五月末には八百人ほどになっていた。

五月二十六日、義久が串木野の港から出航する。天候に災いされながらも六月二日に名護屋に着いた。町田久倍もお供に従っていた。そしてすでに乏しい武器や兵糧のままに朝鮮に渡り、果敢に戦っている義弘

のための支援の態勢を整えつつあった。

秀吉は朝鮮から続々と届く戦勝の報や戦利品の山に有頂天であった。三月の末から朝鮮に渡りたいと表明していたが、周囲の反対にあって延び延びになっていたのであった。しかし渡海の意志は固く、六月二日には実際に海を渡る予定で、まさに乗船しようとしていたのであった。しかし家康・利家が固く止めて、延期ということになった。

六月六日、国兼の元に名護屋の町田久倍からの使いという男が来た。単なる下働きの粗末な身なりをしていたが、眼光があった。

「これを確かにお手渡しせよとのことでござります」

国兼が手に取って包みを開くと一通の文と黒塗りの扇があった。文面は太閤の渡海延期を伝えて、「近々義弘様をご援助のために渡海するべし」とあった。

国兼は顔をくもらせた。太閤が渡航した留守こそは、兵を挙げる絶好の機会だと睨んでいたのであった。そしてさっと扇を開いた。面も裏も何も書かれていない白扇である。

国兼は、裏表を確かめるとじっとそれを見つめた。それは反乱軍決起せよとの合図であった。丸に十の字の島津の紋が書かれてあれば、同時に久倍軍も決起する。白扇の場合は国兼が独自で決起せよという暗号であった。趨勢を見て久倍が本隊とともに国兼の援軍として立ち上がる手筈ではあるが、もし不成功の場合は国兼を見捨てるという密約である。手紙の文面は万一のことを考えて、対外的に不自然な文言は何も書かれていない。

もう平戸に着いて二ヵ月になろうとしていた。国兼も焦りを覚えてていた。

「もうこれ以上ここに留まるわけにはいかない。ぐずぐずしていれば、渡海しないことを怪しまれ、計画が漏れる恐れもある」

実際、一応は反乱組に賛同しながらも壱岐に渡り、義弘の後を追って朝鮮へと行ってしまった武将が三名もいたのだ。

その夜、国兼は主だった武将を宿に集めた。

「今日、太閤様のご渡航が延期になったとの知らせが入った。これからは海が荒れるから来年の春まで延ばせという徳川様、前田様のきついご意見があったそうじゃ。その上に昨日は、渡海を思い止まるように、という宸翰を携えて勅使が名護屋に着かれたとのこと。来春に延ばすといっても、先ずご渡海は実現しないであろう。こうなったら、何時まで待っても詮ないことじゃ。思い切って立ち上がりうではないか。佐敷には同志の者も集まって居るとの報もある」

だれもが何ヵ月も肩身狭く馴染みのない町にじっとしているのに倦んでいた。朝鮮では討ち取った首を運ぶことは大変だからと、切り取った耳を瓶に入れて送らせているなどと聞くだに嘔吐を催しそうな話が伝えられ、やりきれない気分であつた。彼らは、崇高な使命感さえ感じて、興奮した面持ちになった。

「この国ばかりでなく隣国まで地獄に落とすことは、一刻も早く止めさ

せねばならぬ。もう待つのも苦しみじゃ。いざ決行としようではないか」

種佑が言った。たちまち衆議は一決した。国兼、種佑、重彰に伊集院三河も加わって作戦を立てた。

この辺りは名護屋にも近いし、諸大名の大軍が控えている。その中には殆ど同調者はいない。しかし肥後、天草の辺りはいつもなにか燻っている。佐々成政、小西行長などに対して民衆は一揆も何回か起こしている。先ず一番成功しそうな肥後を制覇し、鹿児島からの援軍とともに背後から名護屋に攻め入ろうという計画であった。

六月十日、国兼は仲間全員を船に乗せて、一気に肥後を目指して南下した。真夏の陽光が波頭や水しぶきに燦めいて、緑美しい海岸線や島々を巡って進む。それぞれはその景色を見納めになるかもしれないという思いで無言で眺めていた。

先ず十四日夜、全軍は御所浦に錨を下ろした。主だった武将が従卒二三人を連れて、密かに佐敷に上陸して、宿を思い出の湯の浦に取った。

国兼は崎山新助を呼んで命じた。

「明日はいよいよ佐敷城の攻略じゃ。なに城主殿は出陣中でお留守の筈。一斉に攻めれば昼までには落とせると思っている。実はそちには特別の任務があるのじゃ。それはこの文を人吉の相良様に届けてほしいのじゃ。人吉までは七里程のものだが、大変な山道じゃ。そこを土地の者に案内させて、明朝には着いて、お目通り出来るように急いでくれ。この首尾は至極重要なものじゃて、もし不首尾の場合は明後日、すなわち十六日の卯の刻に、東のあの峯から狼煙を上げよ。これは戦を決する大事な使いであるから、そち以外には頼めぬ。首尾よく我等に味方してくれるとのお返事あらば、この旗を振るのじゃ。それまでに我等は城内に入ることが出来ていなければならない。こちら丸に十字の旗を掲げておく。吉報を待っているぞ」

国兼は、前以てしたためておいた手紙に赤い大きな風呂敷を添えて、「頼むぞ」と手渡した。新助は武勇に優れている上に、面長のきりりとした顔だちが人々に好感を与える。口上もさわやかで、こうした使いには最も頼りである。

文面は「この度我等は、ご主君の命により、太閤様に対し反乱を起こすものである。この世の中を変えるために何とぞご協力を賜りたい」という趣旨であった。新助はそっと身支度を整え姿を消した。

国兼は久しぶりにゆっくりと汗を流してさっぱりした顔の種佑たちと別れの宴を密やかに開いた。

宴はしみじみとしたものであった。皆死を覚悟していた。戦乱の世である。死を覚悟することは今まで何回あったことだろう。ただそれまでの死は名誉を伴うものであった。しかしこの度は不成功ならば反乱であり、しかも成功の見込みは小さいのではないか。汚名は永久に消えぬかもしれない。残された者を思うとき一際断腸の思いが身を苛む。彼らは無言でお互いを労り合いながら、ゆっくりと杯を交わした。月もない空

は静かに更けていった。

早朝船に戻ったそれぞれの隊長は、予定通りの行動に移った。国兼と東郷重彰の船は佐敷に、田尻種佑と伊集院三河の船は松橋に向かった。

巳の上刻（午前十時）に、国兼は佐敷に上陸した。すでに湯の浦には、歳久の手の者何人がそれぞれ五六人の部下を引き連れて待機していた。彼らは昨夜のうちに明日上陸と伝えられていたのである。後続の彼らと合流した国兼の手勢は四百人を越え、一団となって佐敷城を囲んだ。国兼は留守居衆である安田弥左衛門の屋敷に使いを出して伝えた。

「我々は太閤様のご命令にて佐敷の城を受け取りに参った。速やかに開門されよ」

不審に思った弥左衛門は、同僚の境善左衛門と丁度客として滞在していた井上弥一郎に相談した。

「それは奇怪しい。隈本留守居衆から何も連絡はないではないか」

「しかし、これだけの大軍に囲まれての交渉は無理でござるな。なるべく時間を稼いでから、一応城内に入れて安心させ、その間に殿にご連絡して指示を待つとしよう」

弥左衛門は使者に言った。

「まだ隈本留守居衆から何もご連絡ございませぬ。今暫くお待ち下さい」

国兼は又伝えさせた。

「我等は名護屋から直接のご命令を受けている。お断りなされるなら力づくで乗り込むしかない。その場合は戦として戦い取るが、よろしいか」

武力を背に居丈高に国兼は迫った。弥右衛門はしぶしぶ城門を開けた。しかしその間に急を告げる伝令が裏の山道をすべり下りていた。

国兼は、東郷重彰の軍百名に百五十名ほどを加えて、八代を占領するようにと北進させた。そして自ら先頭に立ち、佐敷城をよじ登るようにして城山の頂上の本丸にたどり着いた。本丸はさして広くない。国兼は三十名ほどを側に置いた。

また近くに確かな者十五六人に、用意しておいた決起を促す文を、近郷の豪族や名主に配らせ支援者を募るようにと城を下らせた。そして残りの百名余りを二の丸、三の丸に駐留させた。

十六日の朝、国兼は東の峯に白煙を見た。相良氏は応援を拒否したのだ。

八代には小西行長の麦島城がある。東郷の軍は難関の佐敷太郎峠を越えて田浦に出て、港の漁師町に泊まった。翌十六日、八代を攻めるべく北を目指して進んだ。しかし昨夕までに佐敷城からの反乱を知らせる伝令が麦島城の城代松浦筑前守に着いていた。

松浦筑前守は急遽近辺の土豪たちを募った。相良氏にも援軍の依頼を出した。そして一夜のうちに応じて来た土豪や農民を、日奈久の山沿いに集結し待ち伏せしたのである。先ず赤松太郎峠から狭い海岸線に全軍が出た所をその後部を遮断した。そして崖の上から一斉射撃をかけたの

であった。それは弓矢に寄るものであったが、細い列に崖の上からの射撃では立ち向かうことも出来ない。海に山に東郷軍は敗走したのであった。昨日からの双方の呼びかけに、どちらに着こうかと旗色を伺っていた田浦の土豪たちは、反乱軍の負けを見て取ると、手下の農民たちとともに一斉に敵に回った。

東郷甚右衛門重彰は、退却の途中、田浦で討死した。真夏の午後の太陽が、あたりの血生臭さをいや増した。その知らせは夕刻国兼にもたらされた。

田尻但馬守種佑は、その子荒次郎、荒五郎とともに松橋に上陸した。もう日はとうに落ちていた。彼らは松橋の町に一斉に火をかけた。早く決着をつけねばという焦りがあったそして燃える松橋の町を尻目に八代目指して南下し、小川に泊まった。

国兼のように、正義の戦であると土豪たちに呼びかけることもなく、町に火をかけるようなやり方は、彼らの反感を呼び起こし、敵を八代防衛に集結させる結果となった。

同じく十六日朝、田尻軍は小川を出発した。松浦筑前守は相手が大军であることを知って、籠城の間に援軍を待つこととして、城に閉じこもった。相良氏の応援を取り付けていたし、名護屋に第一報が届くの間もなくだと睨んでいた。

午後になって、東郷軍の殲滅の報が入ると、土豪たちの蜂起はますます増えて、宮原の南、竜峰山の西に展開して田尻軍を待った。そして田尻軍を包み込むようにして合戦が始まった。歴戦の薩摩軍の先鋒隊が戦線を突破したが、麦島城の前には大きく広がった球磨川が横たわっていた。争って船で渡ろうとする背後から矢が放てられ攻めたてられた。対岸には城内からの軍が矢をつがえて待ち構えていた。結局田尻軍も壊滅状態となり、散り散りになった。

田尻親子は、七八人の郎党と共に白兵戦を斬り抜けて佐敷に向かっていた。天草の島陰に夕日は落ちて、残照も消えつつあった。それまでけたたましく鳴いていた蝉の声もいつしか途絶えている。敗残の兵はひたすら無言で歩きつづけた。難所の赤松太郎峠に差ししかかった時であった。喘ぎつつ登る彼らに潜んでいた農民が次々に襲った。疲れ切った彼らの一人に三人ほどの農民が斬りかかる。そして遂には全員が討ち取られてしまった。

翌朝、同調者を募るために田浦にいた国兼の部下は、田尻軍が全滅した話でもちきりになっていることを知った。もはや自分の身も危ない。急ぎ佐敷に戻ったその男は国兼に農民たちの噂話を伝えた。敗戦ということとは早朝によれよれになった伝令が伝えていたが、兵力は決して小さくなかった筈だと思っていた。

「何、田尻殿も亡くなられたと。何ということじゃ」

国兼は絶句した。身体中の血が引いた。暫くして、昨日戻っていた崎

山新助と新たに野田数馬を身近に手招いて小声で命令した。

「田尻殿も東郷殿も討死なされたそうじゃ。もはやこれまでじゃ。そちたちは人吉から大口に抜けて、先ず初にことの顛末を伝えてくれ。多分国許もただでは済まぬはずじゃ。臨機応変に対応して最善を尽くすよう初に伝えよ。そして直ちに川内川を下り、祁答院の金吾様にこれを差し上げるのじゃ。きつと頼んだぞ」

国兼は以前に歳久から頂戴した竜の鍔と町田久倍からの漆塗りの白扇を、しっかりと袱紗に包んで新助に手渡した。新助は百姓の身なりに着替えて、国兼からの大切な品を褌にして肩に掛けた。数馬は同じく百姓に変装そして、見え隠れに新助の護衛を務めながら、暑い日差しの中を素早く下りて行った。

夕刻、国兼は三の丸に下りて、兵士たちを集めて言った。

「明日は出陣じゃ。今夜は早く休むように」

僅かではあったが、酒が振る舞われた。留守衆の安田弥右衛門が若い女三名に酒を持たせて本丸まで登って来た。国兼は酒の瓶一つ受け取った。そして六名の腹心の者以外は下に降りるようにと命じた。弥左衛門と女たちは兵士とともに二の丸まで下りて、酒を振る舞った。

本丸では国兼が六名を身近に呼び寄せた。杯が配られた。

「おぬしらは前々からわしと生死を共にと誓ってくれた。命を預けてくれことに感謝する

が、実はこの酒には南蛮の毒薬を入れた。共に三途の川を渡りたくないものは遠慮はいらぬ。直ちに下りるがよい」

瞬間の動揺はあったが誰も立ち上がる者はなかった。殆どが国兼と同輩の初老の武将であった。国兼に万一のことがあれば殉死するであろう者どもである。

「これは今まで秘しておいたが、実は金吾様との密約があつてな。この戦いに失敗した場合は、お家に迷惑を掛けぬよう、反乱はわし一人の責任として死なねばならぬにじゃ。済まぬのう。わしには例え賊軍として悪名が残ろうとも、金吾様の信頼には背けなかったのじゃ。おぬしらとも実に長いこと共に戦って来たのう。主従は三世というが、今度は楽しい平和な世にて会いたいものじゃ」

一人一人の杯に言葉を掛けながら酒を注ぎ終わると国兼は、

「いざ」

と杯を掲げた。一同もそれに習い、国兼と共に杯を干した。劇薬であった。さして苦痛もなく間もなく全員息絶えた。

安田弥左衛門が女と酒を差し入れたのは計略であった。皆を酔いつぶしておいて一斉に攻め入る手筈であった。彼は、佐敷城の南西の山の木立の中に百名ほどの兵を潜ませていた。やがて佐敷の里の鐘が四つ鳴った。亥の上刻（午後十時）である。佐敷の軍は、この時を攻撃開始と示し合わせてあった。待ち構えていた兵たちは、一斉に鬨の声を挙げて城内に突入して行った。三の丸、二の丸と攻め込まれた梅北軍は先を争っ

て城を下った。

弥左衛門が手下とともに本丸に攻め込んだ。しかし何も反応がなかった。全員の自殺を確認した弥左衛門は、とっさに自殺されたのでは何の功名にもならないと思った。

「いいか。寝首を搔くのじゃ。首一つでも手柄ぞ」

と叫んだ。そして弥左衛門は、梅北国兼とその家臣が酔いつぶれた所を全員討ち取ったと報告した。

山城を駆け降りた者には、相良の佐敷城援軍が待ち構えていた。結局反乱軍は殲滅させられたのであった。

梅北一揆の知らせが名護屋の太閤の耳に入ったのは六月十八日であった。衝撃を受けた秀吉は直ちに一揆征伐の出兵を浅野長政・幸長父子、竜造寺政家に命じ、隈本の留守衆に厳重に警備せよとの命令を発した。本格的な軍の出動命令である。

ところが二十日には一揆が平定したと聞いて、秀吉も胸をなで下ろした。

薩摩の家中の反乱ということで、義久は窮地に立たされる羽目になった。同日知らせを聞いて驚いた義久は、石田三成に宛ててその凡その顛末を報告し、「自分は一切あずかり知らぬこと」と平に弁明、陳謝しその旨を秀吉に伝えてほしいと嘆願した。そして取り急ぎ徳川家康、細川幽斉にもとりなしの依頼をした。

かんかんに怒っていた秀吉は、拳を義久に打ち下ろそうとしたが、家康が止めた。

「考えてもご覧くださいませ。弟兵庫頭殿はその子と共に朝鮮にはありませんか。竜伯殿の妻女は大阪でございますよ。どうして反乱など起こせましょう。妻子、兄弟を見捨てるとどんな理由があるのですか。梅北なるものが、いくら竜伯殿の命令などと言ったからとて、それは自分に味方をさせるための出鱈目であることは明白なことです。この際は罰するよりも島津氏の弱みを利用して、内政に踏み込むほうが得策というものです」

幽斉も同様な釈明をしたので、秀吉もやっと納得し義久への処罰は取りやめた。しかし代わりに義久に反乱の一味の家族全員の逮捕と処刑を厳しく命じた。

早速、国兼の妻初は捕らえられ名護屋に護送された。そして公衆の面前に引き出され、磔の刑に処せられた。武士の妻として死の覚悟は出来ていた初であったが、十字の柱に括り着けられた時は、すでに気絶していた。初老ではあるが小柄で細くまだ名残の美しさを保っている女の処刑は、誰もが顔をそむけた。その日は西風が強く吹いて、もがり笛がひゅうひゅうと鳴っていた。

薩摩では田尻但馬の妻や一揆に加わった者の家族の他、叔父の荒尾嘉兵衛までも川辺の市之瀬で処刑された。何とか郷里大隅肝付の始良に辿

り着いた伊集院三河であったが、捕らえられ家族ともども処刑された。

入来院重時は、東郷重彰をはじめ一揆に加わった者の家族の処刑を命じられた。重彰に梅北と共に行動するようにさせたのは自分である。それに渋谷氏は、関東から下向して二百五十年、無実の女子供を処刑したことはなかった。しかしこの辛い命令を出さねば自分も罰せられる。重時は目を閉じて、手を合わせて深く彼らの冥福を祈り、許しを請うた。そしてついに命令は出された。

重時の家来たちは、泣きたい思いで重彰の父と妻を捕らえた。子供たちは隠れるに任せた。重彰に従った兵士は多く川内川沿いの東郷や樋脇の住人であった。彼らは一人又一人と逃げることもなく捕らえられた。兵士らは女子供には目で逃げろと指示したが、それでも五十二人が捕らえられた。彼らは宵闇の中を舟に乗せられて、川内川を下った。そして緩いカーヴの砂州に次々と下ろされ、首を刎ねられた。

処刑者の首が続々と秀吉に届けられた。秀吉は、二百余りの生首の山を満足気に瞥見して、義久に

「重畳至極」

と言った。しかし秀吉はしたたかである。この件で生じた島津の弱みを逃さなかった。「梅北事件の後始末を徹底的にやれ」という名目で義久を帰国させることにし、その際に細川幽斉も同道させたのである。秀吉は、幽斉に島津領内に楔を打ち込め、と密かに命じていたのだった。

義久は七月一日大口に着いて宮之城の歳久に手紙を書いた。

「私はこれから鹿児島に戻る。この度の梅北の反乱には、私も嫌疑を掛けられたが、徳川殿や幽斉殿のおとりなしで何とか帰国することが出来た。この度は幽斉殿がご一緒に参られている。そなたも疑われる余地は十分あるのだから、伺候して病状をご覧に入れ、一揆のことも全く関係がないことを申し開きするように」

しかし歳久は直ぐには伺候しなかった。五日待っても音沙汰がなかった。幽斉はそのことを自分が無視されていると不快に思った。同時に歳久は、自分に課せられた太閤検地や法改正には最も邪魔で危険な存在になるに違いないと思った。幽斉は、秀吉に一揆の者の中に歳久の家臣が多かったと報告したのである。

秀吉にとって歳久は、ずっと心に引っ掛かる存在であった。自分が薩摩入りをして義久を降伏させたとき、歳久に特に険しい山道を案内された上、その家臣に自分の駕籠に矢を射込んだ者がいた。それは囷の駕籠で自分が乗って居なかったから助かったが、その悪者を引っ捕らえることもしていない。その上中風で動けぬと言って伺候もしなかった。京都にも出候するようにと伝えたのに、延び延びになってまだ顔も出していない。しかも朝鮮出兵に参加しようとしてもいないではないか。

そうした面白くない思いに火を着けたのが、幽斉からの反乱軍の中に歳久の家臣が多かったという知らせである。秀吉は怒り心頭に発した。

七月十日、秀吉は義久に対して、歳久の今までの無礼を一つ一つ数え上げ、歳久の首を差し出せと厳命を記した書状を送った。歳久ばかりで

なく、近隣の者も一味であれば悉く撫で斬りにせよとも命じていた。

十二日夜、秀吉からの書状を受け取った義久は一読して青ざめた。来るものが来たと思った。翌日、義久は主だった家臣を緊急に招集した。集まった一同は秀吉の命令を聞いてその内容と厳しさに一瞬ざわめいた。義久は言った。

「このことは誠に残念ではあるが、降りかかってくる火の粉は、最小限の被害で済むようにもみ消さねばなるまい。一人のために一国を亡ぼすわけにはいかぬ。ここは歳久に犠牲になってもらうより仕方がないと思う。承知おかれよ」

誰もが秀吉の厳命に対して口惜しさの涙を浮かべた。町田久倍は深夜、急ぎ早馬の密使を歳久に送った。翌朝使者は宮之城に着いた。

「この度の事件で太閤様は殿の首級をきつく所望しています。拒否すればお国を取り潰すとのこと。しかし殿がこの度の反乱に関係あるという確たる証拠は何も握っているわけではないのです。むしろこれを機に島津の力を弱めるのが目的と思われます。直ぐにご出頭のご命令がある筈ですが、より良い対応をお考え置き下さるよう」

一読した歳久は、来るべきものが来たと思った。久倍からの使いの者には、国兼からの袱紗を託して帰した。かれは自室でひとり熟考した。

「兄の呼び出しに応じなければ、兄は宮之城を攻めるざるを得なくなるに違いない。そうなれば、わしは梅北の一揆の首謀者と目され我が家は断絶となろう。そのことも覚悟はしてはいたが、太閤殿に確たる証拠を掴まさせなかつたことが幸いであった。わしが犠牲になることにより、世に悲劇という印象を与え、我が家の断絶は避けることが出来るに違いない。ただ兄の前で切腹とは、兄も忍びない思いであろうが、自分もそれだけはしたくない。また兄が一国のためとはいえ弟を犠牲にしたとあっては、兄の人望や信頼を損ねることになるであろう。以前から万一の場合はわしを敵として討ち取れとは久倍との約束である。これはやはり出掛けて行って、戦を挑み、討ち取られるより仕方あるまい」

夕刻に義久から歳久に出頭せよとの通知が届いた。翌日の夜、歳久は妻と娘、孫とそれとない別れの宴を開いた。歳久には男の子が居なかった。娘蓮に出水の薩州島津義虎の次男忠隣を養子として娶わせていた。忠隣の母、平は兄義久の娘であったから、従兄妹同志の結婚であった。しかし忠隣は豊臣軍と十七歳の若さで根白坂で壮烈な死を遂げていた。豊臣に対する憎しみは女たちの方が強いと言ってもいいだろう。六歳になっていた忠隣の遺児袈裟菊丸の頭を撫でながら、歳久は言った。

「お前のお父さんは勇ましかった。大叔父の忠将公に負けぬ手柄を立てると言っただけでな。緋緘の鎧兜が美しく、まるで絵に描いたような凛々しい姿じゃった。お前もその父の名に恥じぬ立派な武将になるのじゃよ」

暫くの団欒の後、歳久はゆっくりとした足取りで高殿に登った。龜頭のように北西に突き出した城山を巡って川内川が滔々と流れている。ここまで来るとこの川も大河の様相を呈して川幅も広くなる。歳久はこの川を愛していた。よく袈裟菊丸を連れて鮎を釣りに行った。大きな毛むく

じゃらな蟹を捕まえたこともあった。

遠くに紫尾の連山が黒く影を見せて、月のない空に満天の星が輝いていた。歳久は山や川に別れを告げている自分が、沢山の星に呼びかけられ、手招かれているように感じられるのだった。ふと気がつくときまで耳に入らなかった瀬音さえもが懐かしく聞こえた。

翌十六日、手勢六十二人とともに歳久は出発した。一行は途中郡山で一休みした後、夕方には鹿児島に入り大乘院に宿泊することにした。夜半何やら外に人の動く気配がした。午前三時頃、見張りの者が注進して来た。

「お館様。外はぐるりと囲まれておりまする」

歳久は覚悟の上であった。

「まあ、捨てておけ。寝込みを襲うこともあるまい」

と言って夜の明けるまで眠った。

町田久倍は、歳久へ使わした者から「久倍にきつと手渡せ」と渡された包みを受け取った。木綿の風呂敷の中に紫の絹の袱紗があった。開くと中には例の歳久の鐔と自分が国兼に与えた白扇があった。袱紗には「長剣梅鉢」の家紋が染め抜かれていた。国兼の紋であった。久倍は目頭が熱くなり、そっと涙を拭いた。

この企てが成功していたならば、秀吉はこの世になく、屈辱的な幽斎の指図を受けることもない筈であった。明るく、人々を解放し、貴久の子である優秀な兄弟の合議のもと、理想的な政治を行うことも出来たのではないか。島津が力を得れば、自分もその参謀となり、徳政を敷き、外国とも仲良くして高い文化を持った国になるよう采配を振るうことも出来たかもしれない。運命は如何ともし難かった。何時の世も善が勝つことは少ない。

「歳久様は私に討つ役目を果たすよう望んでおられる」

久倍はその鐔を見て再確認した。

「私にはお互いの被害を最少にせねばならない務めがあるのだ」

翌日久倍は、義久に自分が歳久追討を引き受けると申し出た。

「私が双方に多くの犠牲者の出ないようにして目的を達します」

義久はほっとして、全てを久倍に一任した。

十七日、大乘院では歳久が全員を集めて言った。

「聞くとところによると太閤様はわしの首をご所望だそうじゃ。さもなければ薩摩を一蹴すると言うきつご命令だそうじゃ。よくよく考えてみれば、この老いぼれの首でこの国が救われるというなら、喜んで兄者に献上しようと思う。ただのめのめと渡すのではわしの名がすたるでのう。明日は一応は撃って出るつもりじゃ。その方たちを道連れにするのは、わしの意ではない。構わぬ。望む者はここを出て行かれよ。何も留め立てはせぬ」

誰一人席を立つものはいなかった。

「ご冗談をおっしゃってはいけません。我等常に殿と生死を共にする覚

悟でございます。今更そんな水臭いことを言ってくださいませな」

思慮深いことで一目置かれている木脇民部が言った。一同も同意の由を口々に言った。皆討死を覚悟した。それぞれ辞世の歌なり遺言など書いて竹の先を割ってはさんだりして過ごした。夜は主従の別れの宴となった。

翌日は奇妙な合戦が始まった。大乘院を打って出た歳久の家臣たちは、取り囲む大勢の兵士たちから、けたたましい空砲と弓弦をべんべんと弾く音、鬨の声の攻撃を受けたのであった。反撃の意志のない歳久軍は、そのすさまじい音の圧力に海岸線の方にじりじりと押され、とうとう海辺に出てしまった。その見せ掛けの合戦は、時には実の矢も射かけたりしながら延々と六時間もかけて、歳久軍に海べりを北上させたのであった。そして歳久軍は遂に竜が水に追い詰められた。

竜が水は左は断崖絶壁、右は海、一人やっと通れるほどの道はあっても行く先は崖の行き止まりである。皆ここが最期の場所になると思った。見通しのきかない岸壁の裏側に回った所で、歳久に最期の時を与えるため、家臣らは次々と攻め込む久倍の家臣と斬り結んだ。歳久は流石に疲れ、岩を背に腰を下ろした。久倍の家臣原田甚次が切り込んで来た。歳久は言った。

「わしが歳久じゃ。わしはは中風じゃから、そちが介錯せよ」

そして歳久は五十八歳の生涯を閉じた。二十七名家臣が、迫る久倍の軍を下がらせ、次々と切腹して後を追った。歳久は身に遺書を携えていた。

「私の体が不自由で太閤様のお役に立てなかったことが、嫌疑を受けて義久公に迷惑をかけてしまったことは残念である。私は義久公に二心など全く無い。自分の死がお役にたつのならば本望である。こうして戦ったのも武人としての分を尽くすためである」

とあった。受け取った義久ははらはらと涙を流した。この無念を晴らす術のない口惜しさに拳が震えた。

歳久の首は細川幽斉によって秀吉のもとに送られた。秀吉は首実検をした後、その首を炎天下の京都の戻橋に晒した。

歳久の最期の知らせを受けた朝鮮の義弘、久保は、歳久の心情を思いやって涙を流したが、諦める他道はなかった。憤りの矛先は朝鮮人民に向けられた。そして先を争ってひたすら進軍するのだった。

歳久の妻は、娘、袈裟菊丸とともに籠城して反抗しようとしたが、義久の懸命の説得により城を開いた。三人は入来院重時に預けられたので、重時は清色城内の坂中丸に居を与えた。義久は幽斉の許しを得て、賄料として樋脇の塔之原三百石を与えた。娘連は重時と再婚して一女をもうけた。袈裟菊丸は後に常久と称し日置島津の三代目とされている。

細川幽斉は、無事歳久の領地の検地を済ませた。そして島津の地に秀吉に一万石（始良郡内）、石田三成に六千石余（曾於郡内）、細川幽斉に三千五百石（肝属郡内）の知行を確保した。

町田久倍は、義久に信任され重用された。後に伊集院・大口の地頭となり、その墓は菱刈町の町指定史跡となっている。

梅北国兼は、突如として秀吉に反旗を翻し、佐敷城で泥酔中に殺された反逆者として伝えられている。一族は誅殺された筈であるが、豊臣の世が終わりししっかりと復権した。

「さつまの姓氏」によれば、子孫は連綿と続き、現三十代が横浜に在住とある。

終